慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	労働における精神的力能の変遷と組織論的課題： 工作機械の発達に伴う個別労働の変化とシステムの機能的要件からの考察
Sub Title	The transition of the intellectual powers in labour and the problem of organization : theory 労働における精神的力能の変遷と組織論的課題： 工作機械の発達に伴う個別労働の変化とシステムの機械的要件からの考察
Author	笠原, 清志(Kasahara, Kiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1976
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.16 (1976.) ,p.59- 64
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文 表紙のタイトル：労働における精神的力能の変遷と組織論的課題： 工作機械の発達に伴う個別労働の変化とシステムの機械的要件からの考察
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000016-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

労働における精神的力能の変遷と組　論的課題

——工作機械の発達に伴う個別労働の変化とシステムの機能的要件からの考察——

The Transition of the Intellectual Powers in Labour and the Problem of Organization—Theory

笠　原　清　志
(*Kiyoshi Kasahara*)

目　　次

㈠　労働における精神的力能（今回）
㈡　熟練労働における技能的性格と労働諸組織の構造（〃）
㈢　工作機械の発達とスタッフ，管理部門の分離成立（次回）
㈣　科学的管理法とシステムの機能的要件（〃）
㈤　二つの労働の対立と組織論的課題（〃）

は　じ　め　に

（一）

技術革新に伴う労働と労働諸組織の研究は我国では戦後，人文学会，東大社研その他多くの研究者によって固有の問題意識から研究の対象になってきた。しかし，それら研究の熟練認識において「熟練＝手工的，主観的カンやコツ」であるという日本的偏見（徳永重良，松島静雄）が根強くその一部に存在していた。そのような認識は我国技術体系の自生的発展の欠如，「技能と技術の截然たる分離」[1]（氏原正治郎），熟練工養成過程の特殊性に規定されたものであるとはいえ熟練労働＝労働の多能性という視点を欠落させることによって親方熟練工を頂点としてその指揮下におけるクラフトの自律的職場集団から，労働者の計画的配置，管理化された職場の分業体制への転換という規定をひどく平板なそして静的なものとしている。

（二）

今日，生産過程における対立の構造は資本＝賃労働という基本的対立に加え，労働の質と協業の求心力をめぐって「現代の社会的紛争は資本と労働との対立であるよりは，経済的，政治的意志決定機構と従属的参加を余儀なくされている人々との対立」[2]（トウレーヌ）や装置をめぐる技術者と労働者との対立，組織における全体を組織する者と部分との関係，知識労働における主労働と補助労働との対立[3]，及び単純労働に伴う差別の構造まで発生せしめている。

以上の如き新しい対立と矛盾の構造を「労働における精神的力能」という分析の視点を手がかりに少しでも明らかにしたいと思っている。そもそも熟練労働の根底にあるものは「手先の熟練や器用さではなく……伝統と経験が労働者に与えた工具，材料，職種の工程に関するものになった知識である。だがそれ以上にそれは工具や材料ばかりでなく，仕事がなされなければならぬ条件における変化から常に生じる困難を理解し克服することを可能にする知識」[4]（ホクシー）である。そういった熟練労働の背後にあり，熟練をして熟練たらしめてきた「労働における精神的力能」ともいうべきものが熟練の解体という技能の技術化の過程において，どのように手労働から分離し，どこへ，そしてどのような階層によって新しく担われるようになったか，確かな実証研究を通して明らかにされなければならない。そういった前提をもって

はじめて今日の生産過程における新しい対立と矛盾の構造を少しでも明らかにしうるものである。ここにおいては，熟練労働の粋といわれる機械工作を中心に仕上げ工，旋盤工における精神的力能の構造を明らかにするとともに熟練労働における技能的性格とその労働諸組織の形成，及び構造について述べてみたい。そして次の機会に工作機械の発達に伴う労働の職種分解と職能変化を手がかりにシステムの機能的要件と科学的管理法がもたらした労働諸組織の変化とその意味について考えてみたく思っている。

(一)　労働における精神的力能

現代社会における組織，労働，人間の問題を考察する時，基本的意味を有するのは工場内分業の変化であり，それに伴う労働諸組織の変化である。二十世紀初頭前後からの大量生産体制の出現，技術革新，それらに伴なう工場労働を中心とする労働の諸特徴のかなり大幅な形態変化は労働過程の自律的展開の規定性から基本的には次のように整理しうるものである。

(イ)労働力の質の変化……万能的，手工的，個別的労働からより部分的，単純反復的な，従って代替性の高い労働への変化。要するに高熟練からより低い熟練への移行。及び新しい熟練の形成。

(ロ)労働過程における労働編成の変化……親方熟練工を頂点とし，その指揮下におけるクラフトの自律的職場集団から機械装置の有機的編成を媒介とし，これへの労働者の配置計画，管理された職場の分業体制への変化。

(ハ)新労働力の養成，訓練形態の変化……長期を要する徒弟制度から比較的短期養成のものへ，かつ前者における主観性の強いものから客観性の高いものへの養成へ[5]。

(イ)は一言でいえば職能分解の問題であり，また(ロ)の問題に関連することによって代替性の低い資本にとって掌握の困難な労働力をより安易に代替，補充しうる労働力におきかえ急激な工業発達に伴なう労働力問題を解決しうる有力な手段となった。また既存の熟練労働者の観点からすれば労働の稀釈化としてうけとれる。(ハ)はそれから必然的に帰結する自律的，伝統的な労働組織から管理された職場への移行であり，いうまでもなく職場管理の発達がこれである。テーラーをはじめとし，また管理権限の機能分化を前提とする統合様式に関する機能的管理の発達はこの系列に属する。また作業場内分業体制の諸変化は社会的分業との相互補完性を強め労働力市場の構成変化を牽引する一方，工場（企業）の内外において管理職能の「正当性」を確保し，それに対する阻止要因を除去する活動を一般化する。以上の如く現実の生産過程の変化は技術的な過程，組織的過程と社会的過程とが全く不可分のものとしてあらわれている。そしてこの三つの過程がある時にはほとんど一体のものとしてはたらきある時は相互対応的なものとしてはたらき作り出されるダイナミックな関係の中に現実の組織，労働，人間の問題は存在している。

ところで労働の微視的構造，つまり労働における精神的力能とはどのようなものであろうか。マルクスは労働過程における労働の微視的構造を次のように述べている。

「自然的なものの形態変化をひき起すだけではない。彼は自然的なもののうち同時に彼の目的を実現するものである。この目的は彼が知っているものであり法則として彼の行動の仕方を規定するものであって彼は自分の意志をこれに従わせなければならない。……労働する諸器官の緊張のほかに注意力として現われる合目的な意志が労働の継続期間を全体にわたって必要である」[6]　明らかにマルクスはここにおいて労働における精神的力能の二つの契機である認識的側面（合法則的側面）と意志的側面（合目的側面），とりわけ後者について述べている。労働はその微視的構造においてくりかえされることによって労働過程の客観的法則を知覚，認識，経験し結果として労働の質を高める一方，その認識的側面（合法則的側面）が必要性，価値意識，意義に支えられて目的に向って統合，制御する意志的側面（合目的側面）[7]　と不可分に結びついている。ここにおける労働意欲の基底にある労働過程の意志的側面（合目的側面）は認識的側面（合法則的側面）から分離され労務管理において「モラール」と規定されているものであり，二つの契機は熟練労働の質的内容を形成している。

熟練，あるいは熟練労働といわれているものは，その認識的側面（合法則的側面）から見れば二つの側面をもっている。一つの側面は労働者が自らの四肢と五感を永年きたえあげて習得した技能であるということである。千分の 2〜3 ミリの傾きを見分けた仕上げ工の指先，眼鏡を透してキルン内の炎の状態を見てキルンの回転速度や石炭吹込量，焼点温度を判断したセメント業における焼成工の眼，溶けた鋼の色合を見て正確な温度確認とそれに対応した操作処置を行いえた熟練工の「カン」（無数の経験，認識パターン群）というものは最近まで労働過程で一定の役割をはたしてきた。今日では精密測定器，遠方総括制御装置，赤外線放射温度計，光電圧温度計の

登場によって熟練工の手，眼，カンに依存しなくても一定の手順さえふめば誰でも正確に傾度，温度測定，操作指示が可能となっている。

もう一つの側面は人間の五感の特徴として同時に起る物事を総合的に認知できるということ，つまり未知の出来事，突然の変化に正確に，かつ迅速に対応できることといったさまざまな経験をつむ過程でつちかわれてきた「判断力と対応の柔軟さ」である。熟練工の強みはこの後者の側面が前者の側面と結合，統一され，機械体系の未成熟な発展段階からくる限界を補っていたことにある。まさにホクシーの表現を用いれば精神的力能とは「工具や材料ばかりでなく，仕事がなされなければならぬ条件における変化から生じる困難を理解し克服することを可能にする知識」[8] そのものである。しかし，社会的分業と工場内分業の有機的結合が，及び機械体系の自律的発展と労働過程のシステム化の要請が個別労働（とりわけ熟練労働）の後者の側面，つまり精神的力能ともいうべき部分を，スタッフ，管理職能として分離する一方，労働者の労働は作業と化した。

（二） 熟練労働における技能的性格と労働諸組織の構造

（イ） 千分の 2～2 ミリを読みわけた指先

熟練労働，とりわけ機械工のそれを語る場合，職人芸あるいは名人といわれる人々に関するエピソードとその労働をささえる熟練形成と仕事秩序の一致，及びそれと不可分に結びついた「一つの世界」に対する郷愁をぬきにしては語りえない。工作機械の機種のわずかなこと，使用される目的の多様なこと，精度の低いこと，測定具の未発達なことは機械工職場と組立職場における労働力の技能性と多能性を要求する。

機械工作の代表的な職種の一つである仕上げ工は，当時の工作機械の精度を反映して非互換的な部分をやすりや鏨を使って修正し種々なる機械にぴったりと組立てることが要求される。小沢清作著「鉄の学校」によれば，この小説の主人公はあこがれの東芝に養成工として入り仕上げ工にまでなるのだがその中に次のような記述[9]がある。「ヤスリの尻押し年といってヤスリを使うだけでも3年はかかるんだ。上手，下手もあるが，まあ6カ月で半人前になれたら上出来だと思え」これが指導主任の初対面の際の挨拶であったそうである。そして主人公が最初にとりくむのはハンマーで鏨の頭を叩く訓練である。ハンマーの打撃面が鏨の真中に打ちこめればいいわけだが鏨の頭よりそれを握った左手の甲の方が高い。そこでどうしても手を打つことになる。小説の文章は「こうすれば手を打たぬという名案はなかった。手をたたきながら会得しろというわけだが覚えこむ前に手が崩れてしまいそうだった」とつづく。

しかし，こうしてひととうり機械工作の基礎を覚えて現場に配属されてもそこには会社ヒエラルキーと一応一致しているものの，技能形成と仕事秩序のピッタリと一致した職人の世界が厳として存在している。つまり自由鍛造でいえば横座，先座，金焼工，ハンドルマンという仕事能力と対応している仕事上の役割の明確な世界の存在である。したがって配属されても機械の操作を教えられるわけではなく，走りづかいとして熟練工のもとにおかれキリコ（ハガネや鋳物を削った削りかす）ひろいや機械掃除をやらされながら仕事を覚えていく。この過程が熟練工にとって一つの前史をなす。挨拶の仕方が悪かったとして，生活面にけじめがないとして，また一度教えた作業を覚えていないとして何回となく殴られた話，そしてそうして殴られた悔しさが職人や親方の「芸」，あるいは「こつ」を盗み自分のものにしていく過程と重なっている。したがって，追い回し時代には辛くても疲れても，毎日何かを体得し確実に自分のものにしていく喜びを代償として得ている日々でもある。

一人前の和菓子職人は微妙な味，色，形といった，たんに和菓子製造に関する能力だけでなく，式菓子は必ず奇数でなければならないといった知識から和菓子にまつわる様々な文化，しきたりにいたるまで知らなければならなかった[10]。したがって謡の菓子の模様を考えるために謡の本まで読むこともめずらしくなかったそうである。つまり，ここにおいては和菓子を作るという労働それ自体が作るという行為を通して買う人（その職人以外の世界）の生活と交じわっており，良い菓子を作れるようになるということがとりもなおさず社会的な常識を身につけていく過程と重なっているのである。結果として，その世界で一人前になることが一人前の社会人として通用するといった職人（労働）の世界がそこにある。こうして職人（熟練工）は仕事の「ウデ」だけでなく，ものの感じ方から生活上のけじめのつけ方，そしてさらに職業における独特のカンまで培われて育つ。たとえば，充分精密に水平を出した定盤にならべた製品は全く同じ高さにたつ。光をあてても差がわからない。ところが熟練した仕上げ工は指先でなるだけでこちらをもう一度研磨にかけろという。放射線をつかう精密測定器を使ってみると彼の指先が千分の 2～3 ミリの差を読みとり，どの程度研磨にかければよいか言い当てていたというこ

とがわかるという。これは「すりあわせ」という作業をやってきた人にだけわかる魔法のようなものである。

機械工作において仕上げ工以上に代表的な職種である旋盤工においても仕上げ工以上に現場における「神様」，及び「神様」にまつわるエピソードにはことかかない。「そのバスをよ，電車の中でちょこっとぶっつけられたらそれでおしまいだろうが」老旋盤工は停泊中の船の機関室にもぐり込んで故障部分をバスどりし電車に乗って帰り，そのバスを合わせて部品を作り一度で「ドンピシャリ」と合わせたことを酒に酔うと自慢[11]するそうである。何種類かのバスを指先にチョコンとひっかけてぶっけられぬように神経を使いながら改札口を抜ける老旋盤工の姿が眼前に浮かぶようであるがこれら「神様」にまつわるエピソードは機械体系の未発達からくる限界を精神労働と肉体労働とを統一した，そしてきたえぬかれた熟練工の精神的力能が補っている過程でもある。

（ロ）　熟練労働における技能的性格と二つの社会的諸関係

（一）

千分の 2〜3 ミリの傾斜を見分けた仕上げ工の指先，停泊中の船の機関室にもぐり込んで故障部分をバスどりして電車に乗って帰りそのバスを合わせて部品を作って一度で「ドンピシャリ」と合わせた老旋盤工の話，これら限りなく存在している神技的な熟練工の仕事はどのようにして可能であったのであろうか。老旋盤工の自慢話に沿って考えれば，まず第一に船のエンジンについて，及びそれを作っている鉄の材質，強度に対する知識が必要であろう。そして第二にとってきたバスの寸法と，なぜ故障したのかということに対する総体としての印象を手がかりに罫書きを行ない，どのような型のどのような腰のバイトを使うか，また送りの角度，速度，深度を考慮しながら万能旋盤を操作する多様な能力が要求されている。このように考えてくると熟練工の労働における精神的力能の構造が明らかになってくる。つまりその認識的側面（合法則的側面）は種々の製品，種々の工作物を扱うという意味における横断的多能性と，一つの工作物において種々なる操作を行なうという意味における縦断的多能性[12]に区別しうるものである。

自然科学や技術学が未だ自律的発達をみなかった十九世紀には生産に関する知識は現場の作業経験による以外になかった。そしてそのような時代の作業経験は個々の労働者に内在化された技能として，あるいは無数の認識パターン群，経験群として蓄積されざるをえなかったのである。そしてこのように客観化されえない技能という労働の構造は「おれもこう教えられたからこうやるんだ」といった伝承形態，あるいは理屈よりも体で仕事を覚えていく過程を不可避なものとする。「伝承方法がものまね的方法によらないで，ピアノやバレーの習得のように組織的訓練（基礎的技術への分解とその教授の組織づけ）が完成しないかぎり，伝習は師匠と弟子の個人的な主従関係をつくり出すのであり，また伝習方法に甘んずる者は師匠の芸能の型をまね，これに近づくことを理想とする家元カリスマ的芸能観をもちつづけるであろう」[13]。したがって以上のような労働における技能的構造とそれが客観化されえないところから規定される伝承形態を基礎に現実の労働過程において二つの社会的諸関係が成立する。

第一に，対内的諸関係において階層内平等性と属人的従属関係を形成する。前章において小沢清作「鉄の学校」を例証しながら仕上げ工の前史ともいうべき部分にふれた。そこにおいてまず最初に印象づけられることはたとえ企業組織の一端を構成するものであれ，労働の構造が技能的要素に依存する現場ではとりわけそれに基づく技能形成と仕事秩序——概してそのような所では技能秩序と会社ヒエラルキーの序列を一致させることがそのような組織（会社）の安定の要素であるが——のぴったりと一致した世界が存在しているということである。

仕事の仕方，生活のケジメ，物の考え方等々を日々の生活と労働の中から教えれる徒弟にとって，職人，親方はその世界において会社ヒエラルキーがたんに高いというだけでなく自分にとって永遠に近ずくべき対象として存在している。しかられ，殴られることは職人，親方が自分に目をかけてくれていることの証拠として，馬鹿にされ軽蔑されることのくやしさが職人，親方の芸と「こつ」を盗み，その域に近づく努力によって昇華される予定調和——組織論的にみれば——の世界がそこにある。徒弟時代の修行の厳しかったこと，そしてその時代の耐えがたく辛かったことを語る場合，そういった厳しい親方にしごまれたからこそ，あるいはそれにがんばりえたからこそ今日の自分があるのだと話を結ぶのが普通である。常に「封建的」という言葉によって表現される技能の持ち主への絶対的服従，及びそこにおける属人的従属性は，単に時代性の反映ではなくその時代，その技能社会における熟練の人格依存性にもとずくものである。「労働がまだ分業を知らず『全人的』であった時，したがって労働のための組織も協業の求心力もなかった時代，労働者の自発性の最大の目標は仕事そのものの習得，熟練の向上であった。そのような時代の管理は技能

養成の秩序と一致して親方――職人――徒弟といった階層構造を」[14] 頼りとする。他方，技能的熟練労働に対する資格獲得者としての職人は自らの横断的労働市場を背景に徹底した同一階層内平等性を実現する。

第二に，対外的諸関係において排他性と階級性をもつ。労働代替性の低い熟練という技能を労働力市場において優位ならしめる基本的なあり方は他に対する徹底的な排他性の保持である。他方，ある一定の技能を有する職人（労働者）がその工場，企業からいなくなるということはその職人（労働者）に付随して存在していた技能，仕事がその工場，企業から消滅することを意味する。したがって労働の代替性の低い技能という名の熟練は職人（労働者）にとって力の源泉であり資本家，経営者にとっては脅威である。この時期，三つの領域（誰を雇い，どのように働かせ，どのように支払うか）に対する決定権，支配権を職人（労働者）が握りうる可能性が存在する。

労働における技能的性格とそれが客観化されえないところから規定される伝承形態を基礎に先述の如き二つの社会的諸関係が成立することは，たんに職人（機械工作）の世界にのみ限定されたことではない。畑作に対する水稲農法の複雑さとその技能的労働の構造に注目しそこから東洋社会における父権制社会の成立を論じたウイットフォーゲルの研究[15]，及び「日本漁業の経済構造」（近藤康男編）におけるカツオ釣とトロール漁業との対比，そしてカツオ釣等々に典型的に見られる船頭を中心とする技能体系とそれに対応する賃金体系，属人的従属性などはその例である。

「トロール以西底曳漁場ではすでに漁業知識が一般的に普及しているので著しく個人技能に頼ることはない。以東底曳ではこの漁場発見技能が決定的に重要である。漁場の複雑なことも以西の比ではない。揚操，カツオ釣では魚群を発見することに技能の重心がある。それも又，決定的な重要性をもつ。尚，以東底曳揚操においては網の下し方，曳き方もまたその船頭技能の中核になっている。漁場における賃金制度の技能的職階制は右の如き技能体系によって生ずるものである。……それが資本家の目のとどかない所で行われるものであることは更に右の体系を賃金体系に転化せしめるものとして強化することになる」[16]。漁業においては揚操，カツオ釣における魚群発見技能というものが，又以東底曳揚操においては網の下し方，曳き方に関する技能がとりわけ漁獲高を決定するところから網元の支配の及びかねる船頭を中心とする技能体系，賃金体系，属人的従属性とが形成されるのである。また漁場においては，海および天候の急激な状況変化に迅速に，しかも正確に判断，対応する必要性からも技能秩序に対応した諸体系，諸関係が形成され補強される。

（二）

前章において労働代替性の低い労働の技能的性格とその伝承形態が親方――職人――徒弟という関係において属人的従属関係を不可避ならしめる一方，資本に対抗しうる閉鎖的であるが強固な階級意識の基盤を形成しうる点について述べてきた。しかし，このことは現実の偏光とそれを受け止める現実の労働過程の仰角をめぐってさまざまな内容を反射するものである。

労働代替性の低い労働の技能的性格とその伝承形態，及びそれと不可分に存在する仕事意識，生活慣行等々が「職種――熟練工――『有資格者』――組合員――職種への雇用――標準賃率という閉鎖的政策と結びつきそれがきびしい階層間排他性により他方では徹底した階層内平等性」[17] によって守られることにより，階級意識の顕在化と労働組合の団結力，交渉力の基盤たりえたという点についてはウェッブやパールマンのような欧米労働組合運動の研究者達がとくに着目した点であった。しかし，我国においては生産技術体系の悲劇的特色ともいうべき自生的発展の欠如，「技術と技能の截然たる分離」[18]，熟練工の養成過程の特殊性，及び経済，社会的要因に規定されて労働の技能的性格とその伝承形態，そしてそれらと不可分に結びついた仕事意識，生活慣行等々が階級意識形成の阻止要因として，あるいは経済的又は政治的領域における階級関係の貫徹に対する歪曲要因としてもとらえられている。大島藤太郎氏はその著書[19]において我国交通労働が自らの労働の特殊性と低賃金構造によってパレット（荷台）制度とフォークリフト体制への機械化がはばまれ，その結果として生じた特殊な奇形化された技能が労働諸組織を封建的に強化させる一方，その労働組織そのものが企業組織の一端として組み込まれることによって異常なまでの労働強化と搾取を可能とし，究極としての資本の利益に奉仕している過程を詳細に分析している。

社会的分業の形成と調整をば市場の社会化メカニズム，つまり市場の「見えざる手」に依存する一方，工場内分業の労働諸組織が技能秩序にもとずく階層間の上への予定調和が約束される時，そのもの自体が組織論的研究の対象とされることはない。しかし，産業化と技術体系の自律的発展の諸過程は外的にも内的にもそのような労働と労働の世界の構造をつきくずした。膨大な，そし

て異質な人的，物的な要素の結合としての内的組織は伝統的な技能秩序と経営方法ではもはや対応できなくなった。つまり，技能の技術化に伴う技能秩序の崩壊と企業規模の拡大，複雑性，及び分業の強調は，調整，統合，つまり管理という問題を生産性と労働問題を媒介として鋭く提起した。そのような時，つまり社会的分業と工場内分業が有機的に結びつき労働における認識的側面（合法則的側面）がスタッフ，管理職能として分離し，作業と化し，た労働力の調整と協業の求心力の統合という管理的要件が企業体系内のさまざまな役割を前提として考察されざるをえなくなった時はじめて組織論的な問題が生じる。

今日，社会学における組織研究が労働過程における社会的諸集団を分析の対象とするよりむしろ価値，規範，権威形態，均衡関係によって規定された一個のシステム内の労働関係を分析の主題としていることは，職業的自律性の衰退の結果，職業がたんに企業体系内のさまざまな役割におきかえられてしまったという歴史的過程を反映[20]しているからに他ならない。

≪補　注≫

本稿では紙幅の関係もあり㈠「労働における精神的力能」，及び㈡「熟練労働における技能的性格と労働諸組織の構造」についてしか論及することができなかった。もし機会があるなら次回において，万能旋盤の単能，専用化，及びプログラミングと特殊諸過程の連続化を特徴とする N·C 工作機の分析を基礎に㈢「工作機械の発達とスタッフ，管理部門の分離成立」㈢「科学的管理法とシステムの機能的要件」㈣「二つの労働の対立と組織論的課題」について述べてみたく思っている次第です。

1) 「日本の労使関係」（氏原正治郎）P 105
「このような技能と技術の截然たる分離は，まさに日本の生産技術の悲劇的特色であって，ここからは19 世紀のイギリスが世界に誇るに足るものとした Craftmanship（職人気質）も，この担い手であった Amalgamated Society of Engineers（合同機械工組合）のような職人の団体もうまれなかった。20世紀の技術革新のはしりであったテーラー派の Industrial Engineering（経営工学）もうまれなかった」（同 105 ページ）と述べている。
2) 「脱工業化の社会」（A. トウレーヌ）P 18
3) 「工場の哲学」（中岡哲郎）P 239
4) 「Scientific Management and Labour」（R. Hoxie）1951 年 P 131
5) 「労働社会学入門」（北川隆吉編）P 19
労働力の質の変化の部分を除いて引用
6) 「資本論」（マルクス）①河出書房，長谷部訳 P 340
7) 「科学と思想」（1974 年「現代の労働と技術」（安斎育郎他）P 22
労働における精神的力能の二つの契機については，安斎氏の分類を基礎としている。
8) 「Scientific Management and Labour」（R. Hoxie 1951 年 P 131）
9) 「労働農民運動」（1973 年 12 月号 P 164「機械工の多能化要求と意識変化」（西村なおき）
10) 「お菓子の歴史」（守安正）「人間と労働の未来」（中岡哲郎）P 44
11) 「思想の科学」（1973 年，第 19 号「枠な旋盤工」（小関智弘））
12) 「産業史における労働組合機能」（熊沢誠）P 114～P 125
13) 「イデオロギーとしての家族制度」（川島武宜）P364
14) 「工場の哲学」（中岡哲郎）P 200
15) 「東洋社会の理論」（ウィット・フォーゲル
16) 「日本漁業の経済構造」（近藤康男編）P 165～P 166
17) 「産業史における労働組合機能」（熊沢誠）P 30
18) 「日本の労使関係」（氏原正治郎）P 105
19) 「封建的労働組織の研究」（大島藤太郎）P 17～P 18
20) 「脱工業化の社会」（A. トウレーヌ）P 175